

エリフの発言における \aleph の考察 —地の文、友人の発言、ヨブの発言、 旧約における用例との比較から—

藤方 玲衣
FUJIKATA, Rei

目次

序 本稿の目的

1. \aleph 概観

1.1. 語源

1.2. 旧約における基本的語義

2. 地の文、神の発言、友人の発言、ヨブの発言

2.1. 報いの信念における要素—1:1(地の文)、1:8、2:3(神の発言)、4:7(エリファズの発言)、8:6(ビルダドの発言)

2.2. ヨブの発言(6:25、17:8、23:7)

2.2.1. 論理的、法的な適切さ

2.2.2. 神と論じる存在

2.2.3. 批判の対象

3. エリフの発言(33:3、23、27)

3.1. 33章の位置づけ

3.2. 内面への関心

3.3. 神についての適切な認識

3.3.1. エリフによる、 \aleph と人間のかかわりの考察

3.3.2. エリフの発言における \aleph

結 善悪の二択をこえて

序 本稿の目的

「人がいた、ウツの地に、彼の名前はヨブ。その人は完全で、正しく、神をおそれ、悪から遠ざかっていた」(ヨブ記 1:1)。⁽¹⁾

ヨブ記冒頭の一節は、ヨブの基本的情報を説明するもので、居住地、名前、その性質が述べられている。これによると、ヨブは「完全で、正しくあり、神をおそれ、悪から離れていた」⁽²⁾。旧約聖書にみられるひとつの信念、善き行いには善き結果が対応するという考え⁽³⁾、に則れば、徳性で卓越しているヨブに災いが及ぶことなどないはずであった。1:1でのヨブの性質の説明は、この物語の問いの前提として機能する。

本稿では、ヨブに帰されている4つの性質のうち、「正しく」と訳した語 ישר' のヨブ記における用例を取り上げ、考察する。語根 ישר' は、ヨブ記中で 1:1 (地の文)、1:8、2:3 (神の発言)、4:7 (エリファズの発言)、6:25 (ヨブの発言)、8:6 (ビルダドの発言)、17:8 (ヨブの発言) で用いられている。

ישר' は、ヨブ記 32-37 章に収録された後代の加筆である⁽⁴⁾エリフの発言において 33 章で 3 回 (33:3、23、27) 用いられている。この章における発言は、直接ヨブに向けて主張されていると考えられる⁽⁵⁾。

エリフが自らの立場、性質を語るくんだり (33:1-7) に含まれる 33:3 では、「わたしのところ (לבי) 」と結びついて言及され、エリフ自身がその所有を主張する。また、33:23、27 での ישר' は、己の罪に気づかない人間を神が諫め、悔悛させる過程 (33:15-30 で描写) において、不可欠の要素とされる。そこで言及されている、悔悛する必要がある人間とは、暗にヨブを指していると考えられる。エリフは、ヨブこそが ישר' を欠いている、と見ている。そうした人間に対する救済措置として、使い (מלאך) 及び מליץ' が ישר' をもたらすのだと語るのである。

Ross は、エリフの発言 (33:14-30) は「嘆きの詩編」の一見無理な飛躍、つまり、嘆きのどん底から突然賛美に移行するという (特異に見え

る)現象の空白に何が起きているのか、を考察しているのであり、その点に独自性があると見た。Rossは論中で、エリフの発言における「使い」の機能の独自性(特にヨブの発言との比較において)に着目している⁽⁶⁾。このように、このくんだりで「使い」の描写については注目されるが⁽⁷⁾、⁽⁷⁾「使い」が告げる **יִשָּׁר** にかんして、ヨブ記の他の部分また旧約聖書の他の用例との比較による、エリフの発言中での位置づけの考察は十分されていないように思われる。

本稿では、ヨブ記1-31章(38-42章には現れない)及びエリフの発言における **יִשָּׁר** の用例を考察し、比較することにより、エリフの発言における **יִשָּׁר** の意味内容、位置づけの特徴を明らかにする。比較のため、旧約における他の用例を適宜引用する。

1. **יִשָּׁר** 概観

本稿では、従来考察されてきた **יִשָּׁר** の基本的語義や訳語を問い直すことは目的としない。以下で基本的意味を確認し、後の考察の土台とする。

1.1. 語源

語根 **יִשָּׁר** は、周辺諸語における対応語が比較的明確であり、ウガリト語の *yšr*、フェニキア語、アラム語の *yšr*、「正当である (be just)、正しい」、また、アッカド語の *ešēru*、及びおそらくはアラビア語の *yasira* 「平易である」と対応すると考えられる⁽⁸⁾。

ウガリト語で、「法的な配偶者」、フェニキアの碑文には、「正しい王」、カルタゴの碑文には、「指導者」「正しい行動」との表現がある。アラム語の意味は「まっすぐにする、付き添う、急派する」である⁽⁹⁾。

1.2. 旧約における基本的語義

語根「**יִשָּׁר**」は、動詞カルで「まっすぐである、平坦である、正しくある」、ピエルで「平らにする、指導する」、プアルで「平らに伸される」、ヒフィルで「均す」(動詞は14例)、形容詞「**יִשָּׁר**」で「まっすぐの、平

らの、正しい」(120例)、名詞で「まっすぐさ、正直さ、正しさ、平地、台地」(「יֵשֶׁר」17例、「יִשְׂרָה」1例、「מִיִּשׂוֹר」23例⁽¹⁰⁾、「מִיִּשְׂרִים」19例)と主に訳される⁽¹¹⁾。

יֵשֶׁר は旧約中で、文字通りに・比喩的に・複合表現の一部として表現される。文字通りには、物理的に平坦である、まっすぐ行くことを意味する。旧約では比喩的用法が支配的であり、倫理、宗教的な価値に基づく適切な行動、法的、倫理的な正しさを意味する。複合表現として、動詞、形容詞、副詞で「～の目(עֵין)に יֵשֶׁר」が多く見られる。これは、目の持ち主の判断を表しており、「神の目に יֵשֶׁר」とは、神が、その行為ないし人を正しいと判断したことを意味する。また、「道」を意味する種々の語(人生行路の比喩)と結びつき、適切な方向付けがなされた平安な生き方を描写する⁽¹²⁾。

形容詞は神の描写にも用いられ、民の支配者たる神の、慈悲と正義を伴う行為や有様の表現になる。その言葉、法、審判が יֵשֶׁר であるとも言われる⁽¹³⁾。人間にかんしては、正義を保持しそれに基づき行動する人(の集団)が、יִשְׂרִים、と呼ばれる⁽¹⁴⁾。

方向、目的、意志に外れることなく合致している、相応しい、適切である状態、または、そのような状態にする、という意味を勘案し、本稿では、יֵשֶׁר のそれぞれの品詞に、「正しくある」「正しい」「正しさ」という訳語を当てる⁽¹⁵⁾。

後の考察では、それぞれの文脈において付加されている意味合いを、適宜他の用例と比較しつつ考察する。

2. ヨブ記 1-31 章

2.1. 報いの信念における要素 (1:1 (地の文)、1:8、2:3 (神の発言)、4:7 (エリファズの発言)、8:6 (ビルダドの発言))

יֵשֶׁר は、ヨブの性質を説明する文中にくり返し用いられる。1:1 は、ヨブの居住地、名前に続き、ヨブの4つの性質を説明する。内容は「完全

(תם)、「正しい (ישר)」、「神を畏れる (ירא אלהים)」、「悪から遠ざかる (סר מרע)」)。Crenshaw は、この(4つもの)性質を兼備することは、「超人的」であり、そんな人は想像の中にしか存在しないのだが、こうした人物は、ヨブ記において展開されようとする議論の前提として要請されているという。議題は、「敬虔は動機から離れて存在しうるか」である。これを物語として提示するためには、糾弾の余地の無い人物、客観的に見て決して神の罰や災いの対象になり得ない人物の存在が不可欠なのだ。⁽¹⁹⁾ Bittner は、ヨブ記は「神は正しくない (のではないか)」との問題を提起していると見るが、その前提はやはり、「ヨブは正しい」かつ「ヨブは不幸である」という二つの事実の組み合わせである。⁽²⁰⁾ いずれにせよ、「ヨブは正しい」という前提から、葛藤が生まれ、議論が展開してゆく。

Fohrer は、ヨブ記の作者は、知恵の教えの神学体系に激しい揺さぶりをかけようとした、と執筆意図を分析しているが、その神学体系の柱は、報いの信仰 (Vergeltungsglaube) である。⁽²²⁾ ヨブ記の冒頭では、この「報い」が正常に機能していることがまず示される。ヨブに帰された性質は、それらを備える人物には富と幸福が約束されている、と信じられていたものである。続いてその子ども、財産の叙述が続くが、これらはその性質への報いとして授与されているのであり、授与の事実そのものが、ヨブの品行の保証ともなる。⁽²³⁾

ヨブの性質は神の発言として二度、逐語的に繰り返される (1:8、2:3)。この設定は、話者、読者のみならず、神も了承済みの事柄として、ヨブ記では位置付けられる。

4:7

「さあ、想起してみよ、誰が、無実な者 (נקי) でありながら、滅びたか。どこで、正しい者たち (ישרים) が、破滅したか」。

8:6

「もし、あなたが、清くかつ正しい (ישר) のであるならば、確かに彼

(エル=シャッダイ、8:5に言及有)はあなたのために目覚め⁽²⁴⁾、あなたの正義の住まいを与えるだろう」。

友人たちのせりふでも、報いと ישר との関係は明確である。

3章でのヨブの嘆きに対しての最初の友人の応答の部分にあたる4:7でエリファズは問いかける。怒涛のような苦難に直面し、死を唯一の希望とする激情を吐露したヨブに対し、この自明の理を想起せよ、と勧めるのだ。Clinesは、エリファズが問題とするのは、ヨブが思い出すか否かのみであるという⁽²⁵⁾。エリファズにとって、無実な者並びに正しい者たちが、苦難の故に滅亡などしないということは、誤りか否かという判断の対象にはなり得ないほど明々白白である。

8:6においてビルダドも、類似の見解を示す。「清く(רָךְ)」は通常、物理的に「精製した」という意で用いられる(聖所の羊、香などについて)が、ここでは、倫理的な意味合いであると考えられる⁽²⁶⁾。ヨブ(「あなた」と呼びかけられている)が、清く正しいという望ましい状態であれば、神は見捨てるはずはない、というのである。ビルダドは、8:4で「もし、あなたの息子たちが彼に対し罪を犯したのであれば、彼は彼らを、彼らの過ちの手に引き渡したはずだ」と、ヨブの子らの死を神の報いという視点で説明している。悪い態度には災いが、良い態度には報いが対応するという信念がここでも表明されている⁽²⁷⁾。

◆ ישר と祝福の対応について

ישר という性質が、祝福を招くという信念は、主に詩編、箴言において表明される。

箴14:11はそのような理解を簡潔に表す。「悪人たち(רשעים)の家は、滅ぼされる(שמד)。しかし、正しい者たち(ישרים)の天幕は、繁栄する(פרח)⁽²⁸⁾」。詩37:37は、「完全な者(תם)を守り、正しい者を見よ⁽²⁹⁾。その人の将来は平安(שלום)であるから⁽³⁰⁾」とうたい、まさに、物語が動き出す以前のヨブの状況に合致する表現となっている。

詩編112編は、「正しい者たち」の品行とその祝福をうたっており、「正しい者たち」とは何か、その一端を教えている。「正しい者たち」とは、ヤハウェを畏れ(ראי)、その命令(מצוה)を喜ぶ人であり(1節)、その人たちへの祝福は、後の代まで続き、財と富に恵まれる(2-3節)。正しい者たちには、「憐れみ深く慈しみ深く義しい」光(אור⁽³¹⁾)が昇る(4節)。貧しい者たちに気前よく与え、貸し、事柄を公正(משפט⁽³²⁾)に処理する(5,9節)。ヤハウェを信頼し、揺るがない(7節)。その正義(צדקה)は永遠にたち(3節)、その人たちは義人として永遠に記憶される(6節)。貧しい人への施し⁽³³⁾や、事柄に対する公正さが、正しい者たちの現実的な行いとしてとらえられている。

行いと祝福との対応関係について、von Ratは以下のように考察している。

「或る人が、彼の属しており、彼との交渉を求めてくる共同体からの要求を、引き受けかつ満足させる時にはいつも、彼は『義人』だとされた……。そのような義人から出てくる全てのことが、彼自身をも支え、また彼を、……祝福の領域へとつき動かす……応報教義(Vergeltungsdogma)について語るのは、あまりに誤解を招きやすい。なぜなら、ここでは確かにイデオロギー的な要請が問題なのではなく、幾世代にもわたってずっと真実であると認められてきたような経験が問題なのであるから……」⁽³⁴⁾。

共同体において、それに属する他人への善行は、その人への信頼を醸成し、名声を高める。この因果関係は、奇跡でも超自然的な力の介入によるものでもない自然な成り行きとして、社会の中で観察されていたと考えられる。

善行と祝福、成功の対応は、宗教的理想的な倫理性の要求という以外にも、現実において確認できる事柄として説得力を持っていた信念であったと考えられる。

地の文、神の発言、友人たちの発言において ישר は、善き行いと祝福とが対応するという、報いの信念にかんする文脈で使用されている。

では、ישר という性質を帰されながら、その祝福を喪失したという立場にあるヨブの発言では、ישר はどのような意味合いで用いられているのか、以下に考察する。

2. 2. ヨブの発言 (6:25、17:8、23:7)

2. 2. 1. 論理的、法的な適切さ—6:25

6:25

「何と苦しいものだろう、正しいことばの数々 (אמרי ישר) は。なにを争うのか、あなたがたの叱責は」。

ישר が、「ことば (אמר)」と組み合わせられている。このヨブの発言は、エリファズの最初の返答を受けたものである。「正しいことば」としてヨブが示すのは、友人（この時点では、エリファズのみであるが）の見解であると解釈するのが妥当である⁽³⁵⁾。Clines は、「אמרי ישר」を「正しい判決の言葉 (words of right judgment)」とし、前半を「正しい裁きの言葉は、なんと悲惨 (distressing) だろう！」と訳し、ここでヨブは自らに向けられた叱責の言葉を告白しているとみる⁽³⁶⁾。エリファズは、人間の罪の不可避性を説く (4:17-21) が、それならば、ヨブが苦しむのは道理である。「判決」としては、正当なのである。Gray は、正しいが非情な道徳的観点からの考察について、ヨブは言及している、と読む⁽³⁷⁾。ヨブの苦難への判断 (ヨブは神に叱責されている (= 災いを蒙っている) → 何らかの罪がある) は、確かに、適切である。その「適切さ」が、ישר によって表現されている⁽³⁸⁾。しかし、それは機械的で冷酷な適切さであり、ישר と祝福との対応関係を逆転させたものに過ぎない。ヨブは、その融通の利かない対応関係に疑問を呈しているわけである。

2. 2. 2. 神と論じる存在—23:7

[23:7]

「そこで、正しい人が⁽³⁹⁾、彼（神を指すと考えられる）と議論している。そして、わたしは救うだろう、永遠に、わたしの事例⁽⁴⁰⁾を」。

23:7 は後半の解釈が難しい⁽⁴¹⁾が、前半での「יִשָּׂר⁽⁴¹⁾が彼と議論する」という描写、その結果として、ヨブにとって望ましい結果が導かれている（ヨブの問題あるいはヨブ自身が救われる）という対応関係は明瞭である。

「論じる（יָצַח）」が 6:25 と共通する。この動詞は、旧約全体で 59 の用例を持つが、内ヨブ記における用例は 17 例と最多である⁽⁴²⁾。基本的に「正しく据える、何が正しいか見せる」ことを意味し、主に教育また法的な文脈で使用される。前者では、「訓戒、教示」、後者では「論争、反論」と訳される⁽⁴³⁾。ヨブ記では、どちらも見られるが、ヨブの発言では多くが「論争」を意味する⁽⁴⁴⁾。

23:7 では、יִשָּׂר⁽⁴⁴⁾である存在が、神と論じる、と言われる。ヨブは、「わたしは知りたい、どこで彼を見いだせるか、わたしは、彼の場所に行きたい」（23:3）と、神との対峙への思いを滲ませる。「神」に類する語は直接出ないが、ヨブが抗議する対象であり（23:4）、多くの力を持つこと（23:6）から、神が強く示唆される。ヨブは、יִשָּׂר⁽⁴⁴⁾という性質を持つ存在が、神と論争するなら、この紛争が解決すると考えているのだ。正しい人 יִשָּׂר⁽⁴⁴⁾は、神と論じあうに足り、その権利を有する者となっている。

箴言及び詩編において、性質 יִשָּׂר⁽⁴⁴⁾を有する人は、神と親密な関係にあるとされている。箴 3:32 は「まことに、ヤハウェは、ひねくれた者（נָלוּז）を嫌う。しかし、正しい者たち（יִשְׂרָיִם）とは親しく交わる」と言明する。他に、詩 36:11（「あなたを知るものたち（יְדַעֶיךָ）」と並行をなす）、64:11（こころの正しい者たち（יִשְׂרָיִם לֵב）はヤハウェを誇る）、140:14（正しい者たち（יִשְׂרָיִם）は神の顔と共に座す）。また、32:1、33:1、111:1 では、神を賛美するのに相応しい者として言及される。125:4 は、こころの

正しい者たちによくしてください、とヤハウエに呼びかける。ʾשׁי' な人は、神と近い関係を結ぶ。神と相対することができ、決して無下にされない存在である。ヨブの発言にもこの信念が響いている。

2. 2. 3. 批判の対象——7:8

17:8

「正しい者たちはこれに慄然とし、無実な人 (בְּקִי) は不敬な人に対し奮起する」。

17:9

「義人 (צַדִּיק) は彼の道をしっかり掴み、両手が清い (טָהוּר יָדַיִם) [人] は、力を増し加える」。

17:8 で「これ」と指示されているのは、17:1-7 でヨブ自身が語る、現在のヨブの惨状である（「霊は壊れ、日々は消え、墓があるばかり」(17:1)、「民の嘲りの対象になった」(6 節)、「目はかすみ、四肢は影のようになった」(7 節)）。この有様に直面した「正しい者たち」は慄然とする (שׁמם) のだという。他に「無実な人」「義人」「両手が清い [人]」の反応が述べられる。この情景は一見、ヨブに降りかかった不条理な (ヨブの行いに対応しない) 災難を見、諸々の善人達が、とんでもないことだと驚愕している様子である。⁽⁴⁶⁾ だが、そうだとすると、9 節で描写される反応への説明がつきにくい。また、善人がその善を堅持することに価値を見出だすという結論に落ち着くようであり、ヨブの主張にそぐわない面もでてくる。⁽⁴⁷⁾

17:10 でヨブは「しかし、あなた方はみな、向き直って、さあ来なさい。だが、わたしは、あなた方のなかに、賢者を見いだすことはないだろう」と言う。8-10 の一連の内容を、Clines は、ヨブによる「善人たち」への痛烈な批評である、と読んでいる。曰く、いわゆる「善人たち」は、倫理秩序 (moral system) が順調に稼働していることを確認するために、

他者の罪悪、そして罰という刺戟^{しげき}を欲している。彼らは、他者のそのような有様を見物することにより、力を得、奮起するのだ。ヨブは、そうした人たちの敬虔さを否定するつもりはないが、その知能の欠落^{わら}を嘆⁽⁴⁹⁾っている(賢者を見いだすことはないだろう)のである。並木もまた、各種「善人たち」への言及を皮肉だと解釈し、義人を自認する友人たちを風刺したものであると見て⁽⁵⁰⁾いる。

3. エリフの発言(33:3、23、27)

3.1. 33章の位置づけ

エリフの発言中に ישר は 33:3、23、27 の三つの用例を持つ。

33章の冒頭には「しかし、さあ聞け、ヨブよ、わたしの演説(גלוי)を。わたしのすべての発言(דברי)に耳を傾けよ(33:1)」との、ヨブを名指した傾聴の呼びかけがある。さらに、ヨブの主張が「『あなた』が語っていた(33:8)」、として「引用」⁽⁵¹⁾される(33:9-12)。これらの表現から33章は、全体としてヨブへ宛てられていると考えられる⁽⁵²⁾。

3.2. 内面への関心: 33:3

33:3

「わたしのこころの正しさ、わたしのことば、わたしの唇の知識が、誠実に⁽⁵³⁾発言する」。

自身の話者としての適格さを、エリフはヨブに向かい披露する。先んじる32章でエリフの関心は、有効な回答を見いだせずにいる不甲斐ない友人たちに向いていたが、33:1での、指名を伴う呼びかけに続く一連の自己紹介は、ヨブに向けた自意識の開陳である。

Clines は、ישר と「ברור」(ברר「清める、選ぶ」)の受動分詞。私訳では「誠実に」と副詞的に訳出)への志向によりエリフは、友人たち(エリフ

によれば、不誠実で、間違っていた)との差異化を図っているとみる⁽⁵⁴⁾。

名詞 יִשְׂרָאֵל とところ (לֵב もしくは לִבָּב) の組は、申 9:5 (イスラエルは、こころの正しさゆえに、土地を受け継ぐのではない、とのモーセの説教)、王上 3:6 (「יִשְׂרָאֵל」の形、ダビデは真実 (אֱמֶת) と義 (צְדָקָה) とこころの正しさ (יִשְׂרָאֵל לֵבָב) をもって、ヤハウエの前を歩んだ、とのソロモンの言^{げん})、詩 119:7 (「わたしはあなたを讃えよう、こころの正しさで。あなたの義の法 (複数) を、わたしが学ぶとき」)にあるが、とりわけ代上 29:17 が、消息をよく伝える。ダビデによる神殿建設のための寄付についての記事の一節である。ダビデは、「わたしの神よ、あなたが、こころを試験し (בַּחֲנֹן)、正しいことごとを (מִישְׂרִים)、あなたが喜ぶ、とわたしは知っています。わたしは、わたしのこころの正しさをもって (בִּישְׂרָאֵל לִבָּבִי)、進んでささげました (נָדַב)、これら全てを……」と呼びかけている。寄付という正しい行為 (מִישְׂרִים) が、単に外面的なものではなく、内面的な正しさに基づいていることが主張されている。ヨブ 33:3 でも同じく、発言の主体の内面の状態が説明されていると考えられる。

3. 3. 神についての適切な認識 : 33:23、27

33:23

「もし、彼のために、使い (מַלְאָךְ) が存在するなら、千に一つにも、仲介者 (מְלִיצִין) が、人間にその正しさを告げるために [存在するなら]」。

33:27

「彼は歌うだろう、人々に向かって。そして彼は言う、『わたしは罪を犯し、正しいことを曲げた。だが、彼は報いなかった、わたしに』」。

神が人間と接触し、教諭するさまが語られる 33:15-30 において、יִשְׂרָאֵל が二回使用されている。15-18 節では、夢 (חֲלוֹם)、夜の幻 (חֲזִיוֹן לַיְלָה) において、神が高慢な人間に対し懲らしめを伝えることが述べられ、19-28

節では、寝台の上の痛み（מכאוב、おそらくは病）に苛まれ、死へと赴きつつある人間の回復の過程、悔悛した人間の告白が描かれる。29-30節は、これらはすべて神のわざなのだ、との総括である。ここで ישר は人間の回復の過程において重要なものとして現れる。

人間は、夢や幻における諫めにも、苦痛による懲戒にも、応答を示さないため、悲惨な結末へといよいよ近づく（15-22節）。しかし、その人間のために存在する「使い／仲介者」が、人間に「彼の ישר」を告げる。そこで、事態は好転する。使い／仲介者に ישר を告げられた人間は、肉体的な回復を見（25節）、その義（צדקה）を返却される（26節）。そして、自分は ישר を曲げていた（עוה）のだ、と告白することになる。結果、そのいのちが、光の中で輝く⁽⁵⁸⁾（28節）という大団円を迎える。

◆望ましいいのちへの条件

エリフは、人間に ישר があるならば生き（「わたしのいのち⁽⁵⁹⁾」は光を見る」（33:28）及び「いのち（חיים）が光の中で輝く」（30節）、なければ死ぬと考える。これは、 ישר を人間にとって望ましい性質、いのち（単なる生存ではなく、祝福に満ちた平安な命⁽⁶⁰⁾）への条件と見る、地の文、神の発言、また友人たちと同様の価値判断である。

3. 3. 1. エリフによる ישר と人間のかかわりの考察

◆使い／仲介者から告げられるもの

33:23で ישר は動詞「נגד」の目的語であり、独立した存在として、使い／仲介者から人間に「告げられる」ものである。「נגד」は、受け手にとって未知の情報を伝えることを基本的な意味とする。人間同士及び、言葉や自然を介した神と人間の交流に用いられるが⁽⁶¹⁾、エリフの発言での用例（36:9、33）では、いずれも主語は神（אל）である。36:9で神（אל）は苦悩のうちにある人々にその（悪い）行いを告げる。この箇所は、苦難に苛まれる人間への諫めという33:15-30と類似の内容を持つ。36:33では、神（אל）は雷鳴（רע）によってその存在（直訳すれば「彼について

(עליו)』) を告げる。33:23 では、神が使いを用いて、人間の理解の範囲には存在しなかった「正しさ」を告げるのである。

יֵשׁוּר を告げるのは、「使い (מְלַאךְ)」、「仲介者 (מְלִיץ)」である。⁽⁶²⁾

「使い (מְלַאךְ)」は、人間により派遣された人間、神により派遣された人間及び超自然的存在を意味し、旧約に多く言及がある。⁽⁶³⁾

מְלִיץ にかんしては、語源の錯綜などもあり、意味領域の全貌は明らかではない。他の用例では、職業的な「通訳」(創 42:23)、「使節」(代下 32:31)、「反逆者」(イザ 43:27) と訳される。⁽⁶⁴⁾「מְלִיץ」は、ヨブによっても言及されている (ヨブ 16:20)。曰く「わたしの仲介者たち、わたしの友たち [がいる (?)]、わたしの両眼は、エロアハに向かって泣く」。16:20 の本文については破損の可能性が考えられており、この節のみでは「仲介者たち」の位置づけは判然としないが、16:21 で「そして、彼が論じるだろう、男のために、エロアハと。人と、彼の友の間で」と言われている⁽⁶⁵⁾ことから、人のために神と論じる存在であると了解できる。

エリフの発言での מְלַאךְ 及び מְלִיץ も、ヨブによる言及と同様の「人間のための弁護者」を意味する、⁽⁶⁶⁾という解釈がある。この線では、「彼の יֵשׁוּר」とはすなわち人間の יֵשׁוּר であり、仲介者は神に対し「実は人間は יֵשׁוּר であったのだ、だから彼を救うべきだ」と論じていることになる。だが、そのように神に異論を唱える存在についてエリフが言及しているとするより、神が人間に向かって語るという行為(「実に、一度、神は語る。そして二度。[しかし] 彼はそれに気づかない」(33:14))の手段としての使者が言われている、と解釈するほうが、エリフの描く神の姿(「みよ、神は偉大に行為する (יִשְׁגִּיב בַּכּוֹחַ)。彼のような教師 (מורה) がいるだろうか」(36:22))により合致する。

箴 4:11 において、「わたしはあなた (息子を指す) を導いた、正しい路 (מַעְגַּל) へ」という表現、また、ヤハウエから授けられた「正しい法 (מִשְׁפָּטִים יֵשׁוּרִים)」(ネへ 9:13) というものはあるが、יֵשׁוּר それ自体が人間にたいし、人間界以外の場所からもたらされる、という表現は独特である。

◆曲げられるものとしての יִשָּׂר

33:27で יִשָּׂר は動詞「עוה(ヒフイル、曲げる)」の目的語である。⁽⁶⁸⁾ エレ3:21では、イスラエルの背信として「彼らは彼らの道(דֶרֶךְ pl.)を曲げた(ヒフイル)、彼らは忘れた、ヤハウエを、彼らの神を」との言及がある。哀3:9では、ヤハウエによる苦難が「彼はわたしの道(דֶרֶךְ)を切石で塞ぎ、わたしの径(בְּתוּכָה)を曲げた(פִּיעַל)」と表現される。イザ24:1では、「ヤハウエが地(אָרֶץ)を空っぽにし(בַּקֶּק)、それを破壊(בַּלֶּק)し、その表面を曲げ、そこに住むものを散らす」という表現がある。「עוה」の用例からは(適切にする、平らかにするという意味を示す יִשָּׂר とは、丁度対象的な)適切でなくする、危険にするといった意味が読み取れる。

יִשָּׂר が「曲げる」という行為の目的語となる例は、旧約ではミカ3:9に見られる。⁽⁶⁹⁾ 「これらを、さあ聞け、ヤコブの家の頭たち、イスラエルの家の指導者たちよ。すべて義を嫌い、彼らは全て正しいことを曲げる……」ここで語根 יִשָּׂר は「יִשָּׂר」ではなく「יִשְׂרָה」の形であり、動詞は「曲げる」を意味する別の語「עִקַּשׁ」が使用されているが、行為内容はほぼ同じである。この諫言は、「ヤコブの家の頭たち、イスラエルの家の指導者たち(קִצְיִי)へ宛てられ、「正しいことを曲げる」という行為は、シオン、エルサレムを流血や不正をもって築く(10節)こと、「その頭たちは賄賂(שָׁחַד)をとって裁き、その祭司たちは代価(מַחִיר)をとって教え、その預言者たちは銀をとってお告げする。そして、ヤハウエに寄りかかって言うことには、『ヤハウエがわれわれの内にはいないとでも？ われわれの上に災いが臨むわけがない』(11節)」という状況を招いている。指導者層が、本来民に果たすべき義務を適切に果たさないという腐敗である。ここで יִשָּׂר は、人々を支配する立場にある者の適切な行動を示す。

3.3.2. エリフの発言における יִשָּׂר

エリフの発言において יִשָּׂר はどのような内容を示すのだろうか。

エリフは、人間が悲惨な結末へ向かう原因は יִשָּׂר の欠落であると考えている。יִשָּׂר の欠落への直接的な説明は33:15-30にはないが、33:9-11

でのヨブの主張の引用（エリフの主張による要約であり、ヨブの発言の逐語的な引用ではない）⁽⁷⁰⁾から考察できる。⁽⁷¹⁾

エリフによれば、ヨブは以下のように主張した。⁽⁷²⁾

「わたしは純粹で、罪はない、わたしは清い、わたしに邪なことはない、みよ、わたしに対し彼は数々の根拠を見つけ出し、彼はわたしを、彼にとっての敵であると見做す、彼はわたしの足をさらし台（70）に据え、⁽⁷³⁾わたしのすべての歩みを監視する」（33:9-11）。

つまりヨブは「自分には罪がない」にも拘らず「神はわたしを苦しめている」、すなわち、神は自分を誤って取り扱っている、と喚いた。エリフはこの点を、決定的な誤りとして指摘するのである。

「そう、ここで、あなたは正しく（קָדַח）なかった。わたしは答えよう。エロアハは人より大きいということを」（33:12）。

神を誤っているものとして糾弾し、「高ぶる（הָגוּה、33:17 参照）」人間の⁽⁷⁴⁾状態が描かれる。これこそが、人間に「יֵשׁוּר」が欠けている（「יֵשׁוּר」を曲げている）有様である。

エリフによれば、神の誤りを主張して^{はばか}憚らないような、神に対する適切な認識（「エロアハは人より大きい」）が欠けている状態であるから、その逆が「יֵשׁוּר」を持っている状態ということになる。つまり、神についての適切な認識を棄えているということである。

結 善悪の二択をこえて

エリフは、33:23、27 を含む一連の流れにおいて、「יֵשׁוּר」に欠けた（を曲げた）人間を描写し、その^{ていたらく}為体をヨブに重ねて弾劾する。エリフは、「יֵשׁוּר」の行動面よりも、内面に關心を向ける（33:3）。人間における「יֵשׁוּר」の欠落は、神に誤りを帰す傲慢な態度、死を招く言行として現出する。そのような危機的状況にある人間に対し、神使が「יֵשׁוּר」を告げる。そして、人間は自らが「יֵשׁוּר」を曲げており、不適切な状態にあったことを悟るのである。

「יֵשׁוּר」は、神についての適切な認識である。それは神使によって、人間にもたらされ得るもの、また、人間によって曲げられる対象ともなる。

エリフは、ヨブが本来持っていた **יֵשׁוּב** を捻じ曲げ、神についての正しい認識を失った傲慢な者となり果てた、と判断する。そのような頑なな人間への救済策として、神が使いを用いて **יֵשׁוּב** をもたらし様子を描いている。**יֵשׁוּב** か **יֵשׁוּב** でないか、善いか悪いかの二択⁽⁷⁵⁾では捉えきれない人間の姿を描いているエリフの発言は、ヨブの物語を俯瞰する立場から、**יֵשׁוּב** と人間、そして神とのかかわりについての独自の考察を提示している。

注

- (1) 特に断りなき限り、聖書本文の訳は、筆者によるものである（BHSを底本とする）。
- (2) これら4つの美德を兼ね備えているというのは、Crenshawによれば、「超人的な」ことである）James L. Crenshaw, *Reading Job*, Macon: Smyth & Helwys, 2011, p. 41）。
- (3) 主に「知恵文学」における信念として言及される（Ronald. E. Murphy, “Wisdom in the OT,” def. 4, *ABD* 6, pp. 920–931: pp. 922 f.; T. Krüger 「知恵／法（Weisheit / Gesetz）」（A. ベルレユング・C. フレーフェル編『旧約新約聖書神学事典』（山吉智久訳、教文館、2016年、56–62頁、特に57–58頁 [T. Krüger, „Weisheit / Gesetz“, A. Berlejung und C. Frevel, Hrsg., *Handbuch theologischer Grundbegriffe zum Alten und Neuen Testament*, Darmstadt: WBG, 2015⁴ (2006), S. 62–67: S. 62 f.]、John Gray, *The Book of Job*, Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2015 (hardback: 2010), pp. 21–31: p. 24)。だが、この「知恵文学」という範疇の画定が困難だとしても（Will Kynes, “The Modern Scholarly Wisdom Tradition and the Threat of Pan-Sapientialism: A Case Report,” Mark R. Sneed, ed., *Was There a Wisdom Tradition?*, Atlanta: SBL, 2015, pp. 11–38 参照）、行為と報いの対応という信念は旧約中に確実に存在する。今回取り上げる ʾוֹרָא ʾוֹרָא を用いた表明では、出 15:26、申 6:18、12:25、箴 2:7、11:11、14:11、詩 37:37、97:11 等、また列王記・歴代誌での、王の評価と王（国）の運命との対応がある。
- (4) 筆者は「エリフの発言」と呼称したヨブ記 32–37 章の部分を、ヨブ記の内容（現在のかたちの 1–31、38–42 章）を踏まえた後の加筆である、と位置付ける。並木浩一『ヨブ記の全体像』（日本キリスト教団出版局、2013）、並木浩一『ヨブ記の全体像』日本キリスト教団出版局、2013年、40–44頁、Stephan Lauber, *Weisheit im Widerspruch: Studien zu den Elihu-Reden in Ijob 32–37*, Berlin: Walter de Gruyter, 2013, S. 40 ff.; James L. Crenshaw, *op. cit.*, pp. 12 ff.; Tanja Pilger, *Erziehung im Leiden: Komposition der Elihureden in Hiob 32–37*, Tübingen: Mohr Siebeck 2010, S. 20 ff.; John Gray, *The Book of Job* (THB 1), Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2010 (paperback: 2015), pp. 66 ff.; Carol A. Newsom, *The Book of Job: A Contest of Moral Imaginations*,

New York: Oxford University Press, 2003, pp. 201 ff.; Marvin H. Pope, *Job* (AB 15), New York: Doubleday, 1965, pp. XXVI ff. に同様の意見有り。この説の当否についての議論は本稿では行わない。

- (5) 3. 1. 参照。
- (6) James F. Ross, “Job 33:14–30: The Phenomenology of Lament,” *Journal of Biblical Literature* 94/1 (1975), pp. 38–46.
- (7) Clines, *Job 21–37* (WBC18A), Michigan: Zondervan, 2006, pp. 735–737, 739–740; Crenshaw, *op. cit.*, pp. 138–139; Gray, *op. cit.*, pp. 399 f., 408; Lauber, *op. cit.*, S. 428 f.; Pilger, *op. cit.*, S. 154 f.
- (8) H. Ringgren, “יָשַׁר,” def. I, *TDOT* VI, pp. 463–465, 472 f. アッカド語でこの語根は主に動詞で現れ、「秩序正しくある、順序正しくなる、…の方へ行く」を意味し、形容詞で「普通の、順序良い、正しい」、名詞で「正しさ、正義」である。動詞の一般的な意味は「(迂回、障害なしに) まっすぐ／正しく行く(行かせる)」「(珍しいものでは) まっすぐ／正しくする・まっすぐ／正しくある」であり、道や水路に用いられた。また、地面が「平らな、きれいに掃かれた」こと、水が「乱れなく、静かに流れる」ことを表現する。比喩的に「秩序正しい、正しい」を意味し、「行く」「道」と結合する。また、時や兆候が「好ましい」ことを示し、「成功する、成功している」人や行動、「繁栄」、倫理的に「正しい、正義の」、「正しく、正確に、適切に」行動すること、扱うことを表す。法的領域では、裁判人の機能として「正義を施行する」(字義どおりには、「他の過剰を無効にし、『普通の』状態を回復する」)。王が「正しく統治する」という意味で通常に用いられ、王笏は、この語から派生して「正義」と呼称された。統治者の「正しさ」「正義」も、この語からの派生。以上の記述は *ibid.*, def. II. 1, p. 464 による。
- (9) *Ibid.*, def. II. 2, p. 464.
- (10) Alonso-Schökel は、「מִישׁוֹר」を 24 例としている。L. Alonso-Schökel, “יָשַׁר,” def. III. 1, *TDOT* VI, pp. 465–471: p. 465; Hannes Olivier, “יָשַׁר,” def. 7, *NIDOTTE* II, pp. 563–568: p. 567; *BDB*, p. 449 は 23 例。
- (11) “יָשַׁר,” “יָשַׁר,” “יָשַׁר,” “יָשַׁר,” *KB*, S. 428–430; Alonso-Schökel, “יָשַׁר,” def. III, *TDOT* VI, pp. 465–471; “יָשַׁר,” *BDB*, pp. 448 f. 参照。

- (12) Hannes Olivier, *op. cit.*, OT, *NIDOTTE* II, pp. 563–568: pp. 564 f.
- (13) Alonso-Schökel, *op. cit.*, def. III. 5, *TDOT* VI, p. 470.
- (14) T. Krüger 「道」『旧約新約聖書神学事典』557–558 頁、特に 557–558 頁 [T. Krüger, „Weg“, *Handbuch theologischer Grundbegriffe zum Alten und Neuen Testament*, S. 455–457: S. 455–456]。
- (15) エズ 8:21 では、エルサレムへ旅するエズラ達一行が、「𐤇𐤍𐤏 な道」を求めて神に祈る。詩 107:7 では、「𐤇𐤍𐤏 な道」を踏ませて街に導くということが、神の救いであると言われる。危難なく安全に目的に向かう道は、イザ 26:7、ホセ 14:10 でも 𐤇𐤍𐤏 で表現されている。
- (16) Hannes Olivier, *op. cit.*, OT, *NIDOTTE* II, p. 566.
- (17) Alonso-Schökel, *op. cit.*, def. III. 4, *TDOT* VI, pp. 468 f.
- (18) 「正しい」とは、「①まがっていない。よこしまでない。②よいとするものや決まりに合っている。法・規則などにならなっている。きちんとしている」(「ただしい」新村出編『広辞苑 第五版』岩波書店、1998 年、1648 頁)。
- (19) Crenshaw, *op. cit.*, p. 41. また、Crenshaw は、ヨブ記におけるこの議題は、1:9 において、サタンのせりふ「理由なしに、ヨブは神を畏れるでしょうか」にも表れていると言う (*ibid.*)。
- (20) Rüdiger Bittner, „Hiob und Gerechtigkeit“, *Das Buch Hiob und seine Interpretationen*, Zürich: Theologischer Verlag Zürich, 2007, S. 455–466; S. 457.
- (21) Fohrer は、エリフの発言の作者と「ヨブ記の作者」とを区別している。
- (22) Georg Fohrer, Georg, *Studien zum Buche Hiob (1956–1979)* (BZAW 159), Berlin: Walter de Gruyter, 1983³, S. 113.
- (23) A. ワイザー『ヨブ記』(ATD 旧約聖書註解、松田伊作訳)、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1982 年、41 頁。[Artur Weiser, *Das Buch Hiob* (Das Alte Testament Deutsch), Vandenhoeck & Ruprecht: Göttingen, 1974⁶, S. 27]。
- (24) 「確かに彼はあなたのために目覚め」を欠く写本もある。
- (25) Clines もまた、こうした見解は、特に知恵文学の影響を受けた文書にしばしば見られる、としている (Clines, *Job 1–20*, p. 125)。Crenshaw もまた、エリファズはヨブに、「正義は必ず勝つ」という自明の理を認めさせようとしている、と述べている (Crenshaw, *op. cit.*, p. 57)。
- (26) Gray, *op. cit.*, p. 186. Gray によると、「𐤇𐤍𐤏」が倫理的意味合いを含む箇所は、

- ヨブ 8:6、11:4、16:15、33:9、箴 16:2、20:11、21:8 の、「知恵文学」に限られる。
- (27) Crenshaw によれば、ビルダドの論理に従うなら、ヨブが(子どもたちのように)滅ぼしつくされていないのは、神の赦しのしるしである、ということになる (Crenshaw, *op. cit.*, p. 71)。
- (28) 七十人訳では、動詞 עמד に相当する ἵστάναι「立つ」となっている。
- (29) 「完全さをまもり、正しさを行え」と読む古代訳もある。松田伊作註(旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』、岩波書店、2005年、75頁)及び BHS アパラタス参照。
- (30) 「平安(שלום)の人には将来がある」と訳すことも可能。
- (31) 松田伊作訳参照。『旧約聖書 VI 諸書』、237頁。
- (32) 「……旧約聖書では、光は神に伴い、神の領域に近い人間へと移った。……これは神の近しさを暗示し……」A. Berlejung 「光／闇」『旧約新約聖書神学事典』518-520頁、その518頁 [A. Berlejung, „Licht/Finsternis“, *Handbuch theologischer Grundbegriffe zum Alten und Neuen Testament*, S. 320-322: S. 320]。
- (33) 同様に箴 11:24 では、施しの行為が名詞 נשך で表現されている。
- (34) G. フォン・ラート『イスラエルの知恵』(勝村弘也訳)、日本キリスト教団出版局、1988年(オンデマンド版2008年)、125頁 [Gerhard von Rad, *Weisheit in Israel*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1970, S. 108]。
- (35) Clines, *Job 1-20*, p. 161; Crenshaw, *op. cit.*, p. 68; Gray, *op. cit.*, p. 169. 対して、並木浩一(岩波訳)は、前半を、「正しい言葉の数々があなたがたにどんな苦しみを与えたというのか」と訳しており、ヨブ自身が発した言葉を指すと解釈している(『旧約聖書 IV 諸書』、324頁)。だが、「あなたがたに」との語句は、本文にはない。また、「正しいことば」が友人たちの言葉を示すと解釈すれば、後半の「あなたがたの叱責(מכּם הוּכַה מכם)」と対ができる。
- (36) Clines, *Job 1-20*, pp. 156, 161, 181.
- (37) Gray, *op. cit.*, p. 175.
- (38) 一方、Weiser は、ヨブは、友人に対して(高慢な非難ではなく)「誠実な言葉」を要求しているのだ、と解釈している(ワイザー、前掲書、104

- 頁 (Weiser, *op. cit.*, S. 59)。
- (39) マソラの母音は「 רָשָׁע 」であり、形容詞か副詞の形であるが、名詞的用法と解釈する。
- (40) マソラの母音に従うなら「わたしの裁き人から (מִשְׁפָּטֵי)」であるが、多くの訳は母音の異なる「わたしの裁き、訴訟事例 (מִשְׁפָּטֵי)」としており、*BHS* においても、この読みが提案されている。ベシッタ、ウルガタにおいても、この読み。Gray, *op. cit.*, p. 311 参照。本稿では「わたしの事例」とし、読み替え提案を採用する。
- (41) 並木は、「私を裁く者 (מִשְׁפָּטֵי)」のゆえに (ヨブが) 解放されると読む (『旧約聖書 IV 諸書』、370–371 頁)。対して Clines は、「私の裁く者」から私が逃れる、と解釈している (*Job 21–37*, pp. 573, 595)。筆者の訳は、Gray 訳「そして、私は私の事件 (case) を完全に救うだろう (bring off)」(Gray, *op. cit.*, p. 311) を参考にしたものである。動詞 (פָּלַט) の形 (pi. 1s. impf. coh.) を活かした訳であると判断した。
- (42) Abraham Even-Shoshan, *A New Concordance of the Bible*, Jerusalem: “Kiryat Sefer” Publishing House 1993, p. 466 による。
- (43) G. Mayer, “יָכַח”, def. I. 3–4, *TDOT VI*, pp. 64–71: pp. 65–70、及び岩波訳の用語解説「くんかい 訓戒 (*tōkahat*)」(『旧約聖書 IV 諸書』、補注 21 頁) 参照。
- (44) 9:33 (分詞形) わたしたちの間 (文脈から、神とヨブであるとの解釈が妥当) には、論じる者がいない、13:3 エルに向かい論じる、13:10 かれ (神) は必ずあなた方 (友人たち) を論難する、13:15 かれの目の前に論じる、16:21 かれ (仲裁者) がエロアハと論じる。また、岩波訳の用語解説 (同書) 参照。
- (45) 6 節で呼びかけられるヤハウエ、並びに 8 節の神 (אלהים) を指すと考えられる。ただし、8 節の אלהים について *BHS* は読み替えを提案しており、その読みを採用するならば、 אלהים の語は現れないことになる。しかし、いずれにせよここで二人称を以て呼びかけられているのは、神的な存在である。
- (46) Crenshaw はそのように解釈しており、ここで正義と不正義との間に葛藤が生じているとする (Crenshaw, *op. cit.*, p. 99)。また、Weiser は、ヨブは

- 苦難を回避することを止め、それを直視し引き受けることを決意したのであり、その姿勢から湧き上がってくる新たな力がここでいわれている、と解釈している(ワイザー、前掲書、241頁(Weiser, *op. cit.*, S. 132))。
- (47) 8-10節は、ヨブの性格に合致せず、嘆きの過程を妨害しているとして、多くの注解者により、削除されてきたという(Clines, *Job 1-20*, p. 397 参照。無論、このような「～の主張、性格にそぐわない」という理由のみでの本文の削除や改訂には、^{かんせい}陥穽が存在する)。Gray は、9-10節を二次的拡張であると判断するが、8節については、ヨブによる友人たちの冷酷さへの非難であり、かれの論題の神の正義への訴えへの転換を示唆する箇所だとし、ヨブの発言として維持する(Gray, *op. cit.*, pp. 247 f.)。
- (48) マソラは、「かれらは皆(כלם)」。しかし、後続の動詞「向き直れ」は二人称複数形であり、整合しない。Gray は(S、V またいくつかのヘブライ語版と共に) כלם と読む(Gray, *op. cit.*, 256 f.)。また、文頭 אולם を、重複誤記(dittograph) であるとして削除する。並木も同じ線(「あなたがたは皆、私に向き直り……」、『旧約聖書 IV 諸書』、352頁)。Clines は、「あなたがたは皆」と訳したうえて(Clines, *Job 1-20*, p. 369)、主語と動詞が一致しない例はあるとして、כלם への訂正の必要はないという(*ibid.*, p. 374)。ここでは本文の形を כלם ととるにせよ、כלם とするにせよ、言及されているのは「あなたがた」であるとみて差し支えはないであろう。
- (49) Clines, *Job 1-20*, p. 397.
- (50) 『旧約聖書 IV 諸書』、353頁。
- (51) 逐語的な引用ではない。3.3.2. 参照。
- (52) Clines, *Job 21-37*, p. 724; Gray, *op. cit.*, p. 399.
- (53) Gray は、マソラ本文では前半と後半の長さが歪(前半は短すぎ、後半は長すぎる)だとし、校訂している。それによれば、ישר の文字列は、「...יש ב.י」となり、ישר の語は消滅することになる。Gray, *op. cit.*, pp. 402 f.
- (54) Clines, *WBC 18A*, p. 725.
- (55) マソラ本文の母音は יִשָּׁר であるが、BHS は יִשָּׁר (שיר「歌う」の impf. 3ms) か יִשָּׂר (アラビア語の 'aşra 「彼は知らせた」から類推した新語 שרר の hif. 「告白する、明かす」による) への読み替えを提案している。Clines は語形から見て、רוּי「見る」の活用形とするのが最も自然だと

する (Clines, *Job 21-37*, p. 703) が、続く動詞 אָמַר「言う」との兼ね合いから「歌う」と訳す。Driver / Gray も、「見る」は不適当と判断する (S. R. Driver / G. B. Gray, *A Critical and Exegetical Commentary on Book of Job* (The International Critical Commentary), Vol. 1, New York: Scribner, 1921, p. 293)。並木 (『旧約聖書 IV 諸書』、402 頁)、Pilger (*op. cit.*, S. 44)、Lauber (*op. cit.*, S. 62) も「歌う」の線で訳す。筆者もこれらの意見と共に「歌う」とする。

- (56) Newsom, *op. cit.*, p. 215.
- (57) 「穴 (שַׁחַת)」に行く (33:18、22、24、28、30)、つまり、死ぬこと。
- (58) この「光 (אֹר)」は昼間の日光であり、命の象徴である。そして、シェオールとの対比を暗示している (Clines, *Job 21-37*, p. 740)。Clines は、שַׁחַת とシェオールを同一視している (*ibid.*, p. 731)。
- (59) ケレーによれば、「かれのいのち」。
- (60) 「…完全なる、祝福に満ちた、平安なる命が視野に入れられる。命は、幸福、慈愛、健康、成功を含み、持続が目指された」(Bernd Janowski (旧約)「命 (Leben)」『旧約新約聖書神学事典』、137-140 頁、その 138 頁 [B. Janowski, „Leben“, *Handbuch theologischer Grundbegriffe zum Alten und Neuen Testament*, S. 313-315: S. 314])。
- (61) Garcia-López, “גַּגַּד,” def. II, *TDOT IX*, pp. 174-186: p. 176; Robert H. O’Connell, “גַּגַּד,” *NIDOTTE III*, pp. 16-18: pp. 16 f.
- (62) 後者は前者の言い換えであると考えられる。
- (63) Freedman-Willoughby, “גַּלְגַּלִּי,” def. IV, *TDOT VIII*, pp. 308-325: pp. 311-320.
- (64) C. Barth, “לִיִּי,” def. III, *TDOT VII*, pp. 547-552: pp. 550 f.
- (65) マソラ通りに読めば、「人の子 (בֶּן אָדָם)、かれの友」(名詞の羅列)であるが、「のあいだ (בֵּין)」と読みかえている。この読みは、いくつかの写本に保存されている。
- (66) *Ibid.*, p. 551.
- (67) 名詞 יֵשׁוּב が他の名詞 (「こころ」、「道」と組み合わせられず、単独で用いられる例は、他に王上 9:4、詩 25:21、箴 14:2、17:26 がある。詩 25:21 では、「完全さ (תָּם)」とともに、動詞の主語。また、列上 9:4、箴 14:2 では、「まっ

- すぐさにおいて歩む」という表現。箴 17:26 では、「立派な人々 (נְדִיבִים) を、[その] 正しさのために打つことは良くない」と言われている。
- (68) יָשָׁר が「道」に関連して言及され、曲がっていることと対比される例はある(箴 14:2、21:8)。
- (69) 「曲げる」の類語との組ではないが、יָשָׁר が動詞の目的語である例は、箴 11:24 にもある。「まき散らしながらも、なお増し加える者がいる。しかし、יָשָׁר を拒みながら(חָשָׁךְ)、欠乏する者[もいる]」。ここでは、יָשָׁר を拒むということが言われている。これを勝村弘也は「過度に物惜しみをする」と訳している(『旧約性聖書 IV 諸書』、474 頁)。Ringgren も同様に、寛大さと慈悲深さへの言及であるとし、豊かに人に与えるという寛大さは祝福され、吝嗇は祝福から遠ざかる、という趣旨であろうとする(H. リングレン(箴言)・W. ツイメリー(伝道の書)『箴言・伝道の書(ATD15)』(有働泰博他訳)、ATD・NTD 聖書註解刊行会、1991 年、104 頁[Helmer Ringgren / Walther Zimmerli, *Sprüche / Prediger* (ATD 16/1), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981³, S. 51])。24-26 の三つの節は類似の内容。26 節では、「穀物を惜しむ者を、人々は呪う」と言われており、11:24 の יָשָׁר は他者に対する適切な行動を意味していると考えられる。
- (70) 並木浩一の諸註参照。『旧約聖書 IV 諸書』、401 頁。
- (71) Pilger, *op. cit.*, S. 154. Pilger は、ここで言及されている人間の「יָשָׁר の欠落」は、33:9-11 でのヨブの引用と、15-18 節で言われる「高慢」への非難から明らかである、という。
- (72) 33:8 「たしかに、あなたはわたしの耳に語った、あなたの主張の声(קוֹל מְלִיזַי)をわたしは聞いた」。
- (73) マソラの母音によると、希求法であるが、意味が通り難い。母音を読み替えて(通常の)未完了三人称男性単数で読む。
- (74) ミカ 3:9 の、神はわれわれの側にあり、として居直る指導者の姿と通底するものがある。
- (75) ヨブの性質説明の文は、その二分法に基づくと考えられる。Clines, *Job* 1-20, p. 12 参照。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 ふじかた・れい)